

とはち通信

※長崎西南部の史蹟・名勝・天然記念物等の紹介通信

第 10 号

※一説によると、かつて長崎西南部一帯を総称して戸八ヶ浦（とはちがうら）と呼ばれた時期がありました。現在、この名は存在しません。長崎西南部に対する尊敬の念をこめてこのようなタイトルをつけました。

二〇〇九年 二月 一日 落矢八郎

戸町番所

番所とは簡単に言えば異国船警護のため武士が駐屯した場所です。国分町経由のバスに乗ると、「戸町番所跡」というバス停がありますが、この辺りが戸町番所の跡だと言われています。ほかに番所は国分町の対岸の西泊にも存在しました。戸町番所は西泊に対して「東泊」と呼ばれていたようですが、今は誰もこの名前では呼んでいません。番所は長崎港の東西に存在しましたが、当時これらの番所は「千人番所」・「沖ノ番所」などと呼ばれました。前者は両番所に常駐武士が合計千人程いたこと、後者は大波止から一里の距離に二箇所の番所が存在したことが起因しています。したがって、有事の際は港の外内に点在する台場との連携を密にとりながら、異国船の排除に努めたものと思われます。しかし、江戸時代の期間を通して、このように機能したかどうかは私にはわかりません。

戸町・西泊の両番所は一六三七（寛永十四）年の島原の乱で設置され

たと言われます。キリスト教の禁止を徹底した江戸幕府は、貿易港である長崎に不審船の監視目的で番所を設置したそうです。これが両番所の始まりとされています。

戸町番所は小菅浦（入江）の出口付近（北部突堤）と戸町一丁目・国分町の町境付近（南部突堤？）に突堤があり、北部突堤付近には水主木屋・道具小屋が存在しました。また、番所の境内は大きく三つにわかれていたそうです。

①南側：五段の階段状の地形に造成され、各段に木屋を設置しました。親岳頂上方向から南一番木屋から南五番小屋まであり、五番小屋の横には裏木戸番所がありました。
②中間：三段の階段状の地形で、親岳頂上方向から上・中・下の各段に二棟の木屋がありました。

③北側：水主木屋を登ると表城戸番所、その横に石火矢蔵が存在したそうです。また、この上には鹽硝蔵が木柵に囲まれた状態であったそうです。以上、簡単ではありますが、番所の

状況を説明しました。この他にも遠見番所が①③の上（親岳頂上方向）にあったそうです。

現在、戸町番所へ足を運ぶと「**従是御番所境内**」の標柱をみる事ができます。標柱は県指定の史跡として四本登録されていますが、私は二本しか確認していません。残りの二本は何処へ…。これらの標柱は天保期に作られたもので、他に五本、合わせて九本存在したそうです。しかし、一八六四（元治元）年に番所は廃止され、明治の世になるとこの地は開発されていきます。そのことについて『長崎市史』ではこう書かれています。

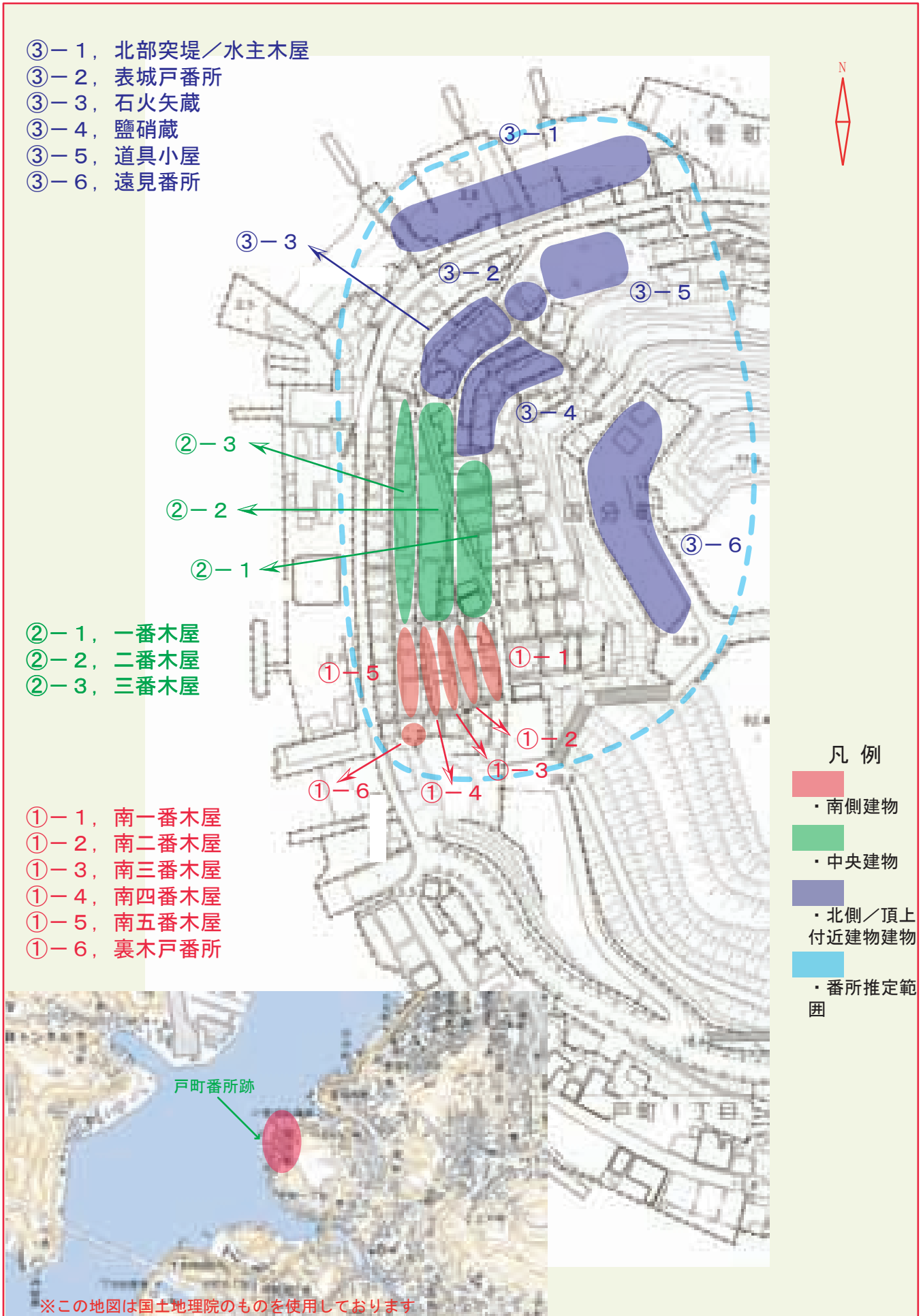
「戸町御番所舊敷地は今の戸町と小菅との中間畑地でその海濱に近き部分は全く現形を失なつて居るが、畑地となる部分には幾分の形状を存して居る。明治二十年頃戸町村へ縣道開通に際し舊敷地を貫通されたのと、然も耕作人の不注意によりて往時の原形を破壊し去れるもの大部分を占むるは遺憾の至りである。」

このことからわかるように、明治

事務局
とはち通信
●ホームページ
とはち通信とはち通信で検索
●メール
h_ochiya@yahoo.co.jp

戸町番所の現在ですが、海岸部は造船地帯で斜面部は住宅地・畑地になっています。この他、斜面の上にはマンションが造成されており、かつての面影は全くない状況です。みなさん、ここにはかつて番所があったという事実だけでも頭の片隅に置いて、後世へ伝えてください。（文責 落矢八郎）

【引用・参考文献】
福田忠昭ほか 一九三七 「戸町番所」『長崎市史』長崎市役所
次号は小ヶ倉ダムに関する話を予定しております…



第1図 戸町番所跡位置図および推定範囲（案）

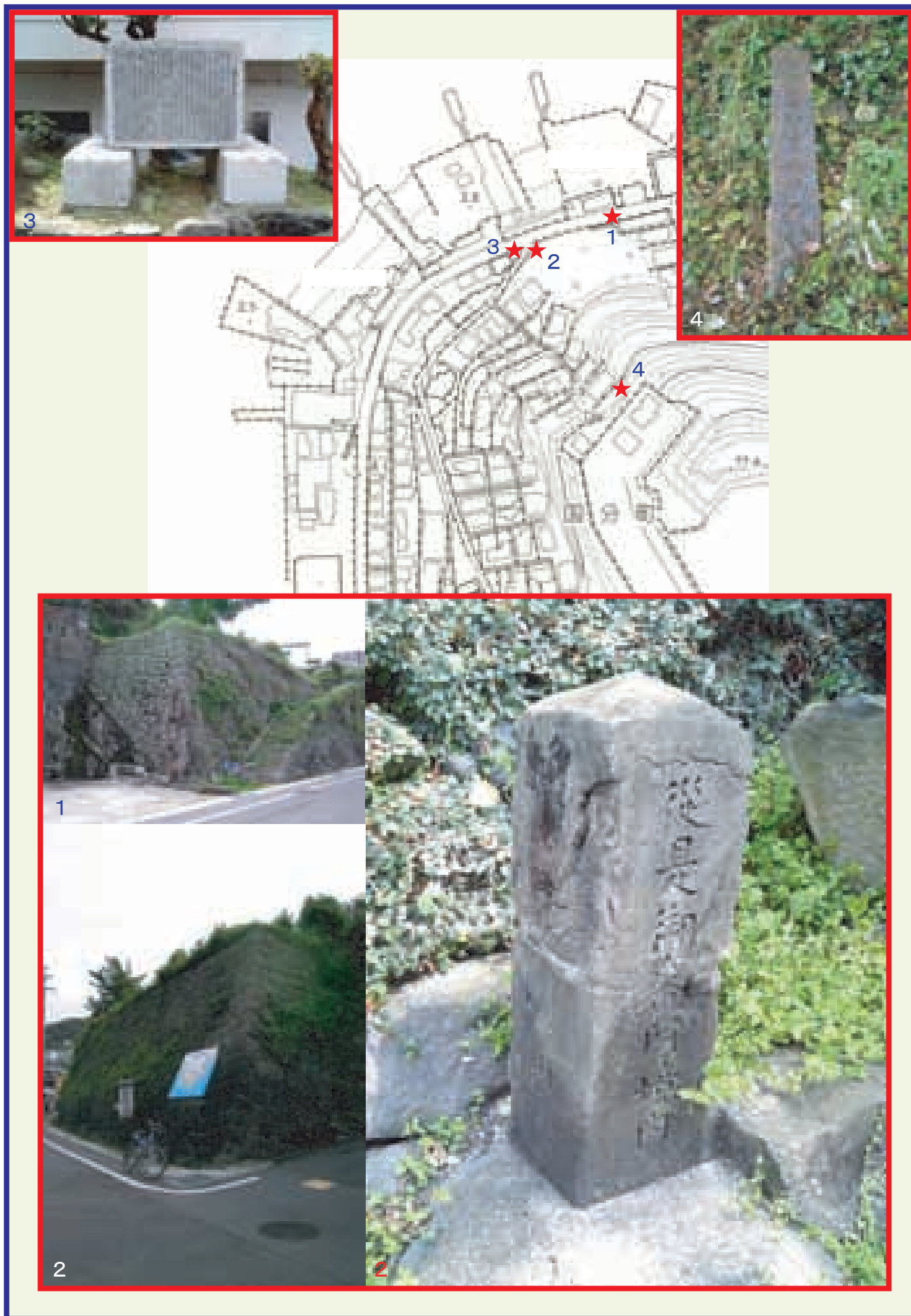


写真1 戸町番所境内石垣および標柱状況写真



写真2 六番標柱写真（裏面は未確認）